

### QA13 基準値は、乳幼児や胎児への影響も考えて決められていますか。

基準値は乳幼児を始め、全ての世代に配慮して決められています。

年齢や性別の違いによって、食品の摂取量や放射性物質の健康に与える影響は異なります。そこで、年齢や男女の別、妊婦等 10 区分に分け、各区分別に、仮に食品の 50%\*がその濃度レベルの放射性物質を含んでいて、それを食べ続けても追加的に受ける年間の放射線量が年間約 0.9 ミリシーベルトを超えない値（食品中の放射性物質濃度の限度値）を割り出すと以下の表のようになります。

■年齢区分別の摂取量と放射性物質の健康に与える影響を考慮し限度値を算出

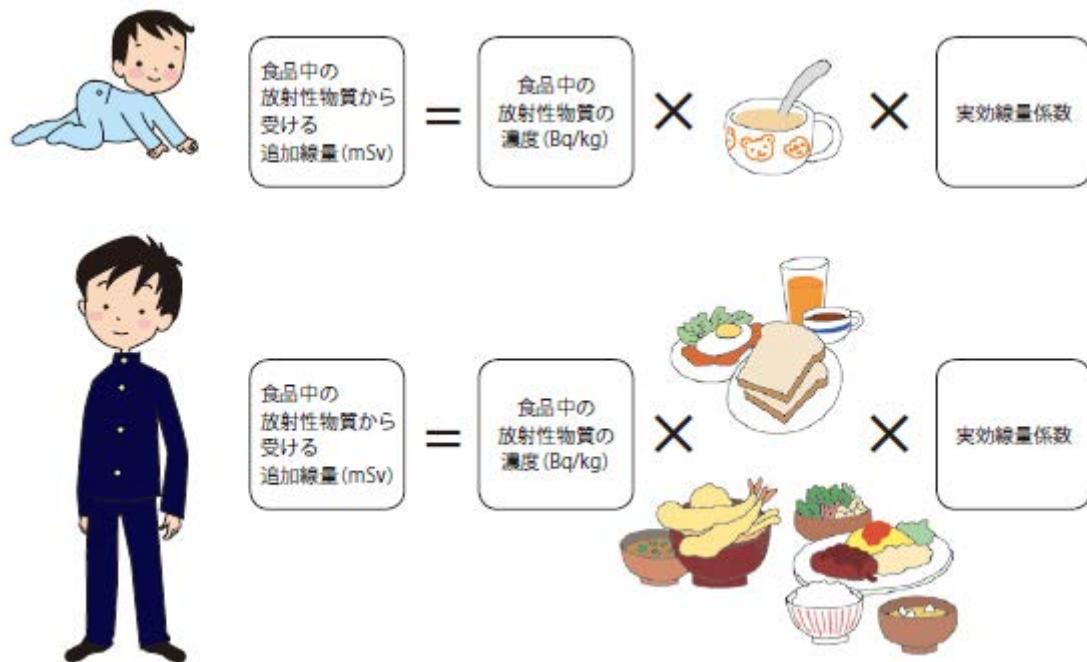
年齢区分	摂取量	限度値(Bq/kg)
1歳未満	男女平均	460
1歳～6歳	男	310
	女	320
7歳～12歳	男	190
	女	210
13歳～18歳	男	120
	女	150
19歳以上	男	130
	女	160
妊婦	女	160



基準値  
100Bq/kg

年齢・性別区分ごとの限度値は、13歳～18歳の男性の限度値 120 ベクレル/kg が最も厳しい（小さい）値になります。これを踏まえ一般食品の基準値を「100 ベクレル/kg」とすると、全ての世代、性別に対して考慮された基準値となります。

年齢が小さくなるほど限度値が大きくなる傾向があるのは、年齢区分ごとの線量係数の差よりも、食品摂取量の差のほうが限度値の計算に大きく寄与しているためです。



さらに、食品安全委員会が行った食品健康影響評価において、「小児の期間については、感受性が成人より高い可能性」が指摘されているため、1歳未満の乳児が食べることを目的に販売される「乳児用食品」と子供の摂取量が多い「牛乳」の2区分については、流通品のほとんどが国産であるという実態からも、全てが基準値上限の放射性物質を含んでいるとしても影響がでないよう配慮し、一般食品の基準値の2分の1の（2倍厳しい）50ベクレル/kgを基準値としています。

- ※1：日本の食料自給率等を考慮し、流通する食品の50%（国産品の全て）が放射性物質を含む場合を仮定しています。
- ※2：1歳未満の食品の平均1日摂取量は約0.4kgで、13歳以上の男子では約2.1kgです。
- ※3：乳幼児は少量の食事量全体で約0.9mSv以下とする必要がある一方で、男子中高生は多量の食事量全体で約0.9mSv以下とする必要があるため、食品1kg当たりの限度値が小さくなります。
- ※4：乳児用食品の規格基準が適用される食品には、「乳児用規格適用食品」等と表示されています。しかし、いわゆる「粉ミルク」は乳児用規格適用食品であることが容易に判別でき、表示を省略することができます。

---

出典：消費者庁「食品と放射能 Q&A」（第10版）より作成

出典の公開日：平成28年3月15日

本資料への収録日：平成28年3月31日